

阿嘉島臨海研究所の2000年

保坂 三郎

(財)熱帯海洋生態研究振興財団
理事長

岩尾 研二

阿嘉島臨海研究所

The year of 2000 at AMSL

S. Hosaka · K. Iwao

世界各地からサンゴ礁の荒廃が報告され、その保全や回復の必要性が叫ばれて久しいが、本邦において本格的な対策は実施されていない。1998年の白化現象から2年が経過し、「喉元過ぎれば...」ではないが、一般の人達と話をしている、白化は過ぎ去ったことであり、これからは回復していくだろう、という楽観的な印象をもつ人の多いのに驚かされる。確かに、破滅的とも言える2年前の白化を乗り越えてサンゴ礁は存在し続けているが、いまだ荒廃は進み、予断を許さないのが現状である。サンゴ礁研究者の多くはそれを認識し、保全や修復のための努力を続けている。先日の第9回国際サンゴ礁シンポジウムでも、全1420タイトル中、「資源管理」、「アセスメント、モニタリング、回復」、「サンゴ礁現況報告」、「白化現象」といった話題に対して合計416件、また「サンゴ礁の未来」についても185件の発表があり、それぞれについて議論が交わされた(関連報告: 本誌36ページ)。

阿嘉島臨海研究所でも、サンゴ礁の現状を知るために、4月に阿嘉島周辺をはじめとした慶良間列島の6点においてコドラートを用いたサンゴ礁の現況調査を行い、9月には阿嘉島マエノハマにおいて1998年より継続しているベルト調査を行った。その結果、1999年11月に群体数125、被度20.3%であったマエノハマの造礁サンゴは、92群体、被度19.5%に減少していた。本年は、大きな白化はなかったものの、台風の襲来が多く、このサンゴの減少は、その影響と思われる(この成果の一部は、前出の国際シンポジウムにおいて谷口洋基研究員によって発表された)。

荒廃したサンゴ礁の修復方法の一つとして、人為

的なサンゴの増殖が考えられ、それには2つの方法がある。1つはサンゴの成長・無性生殖を利用した移植であり、もう1つは有性生殖を利用した種苗生産である。本年、阿嘉島臨海研究所では、前者について東京水産大学資源育成学科と共同で研究を進め、いくつかの有用な知見を得ており、その成果は近く発表される予定である。また、後者については、放流手法に課題が残るものの、国立遺伝学研究所と共同で研究を行っているペプチドを用いた手法などにより、その種苗生産自体には一応の目処を立てることができた(その成果の一部は、前出の国際シンポジウムにおいて岩尾により発表された)。

サンゴ礁の保全・回復のためには、サンゴおよびサンゴ礁生態系についての基礎的な調査・研究の継続が必要である。本年も日本財団から補助金を受けて調査を進め、情報を収集し蓄積することができた。この誌面を借りて、ご理解を賜った同財団に深く感謝申し上げたい。

調査・研究で得られた情報を利用する上で、その公表は重要なポイントである。特に生態系の保全と修復は、突き詰めれば環境を対象とした大きなスケールの問題であり、行政機関ならびに一般の人々の理解が必要である。本年、正式なものだけでも延べ24回、合計約480名の人々に対してサンゴ礁教室を行い、また、当研究所ホームページの充実にも努めた。4月には、新たに藤田和彦研究員を迎えた。彼は、サンゴ礁生態系の重要な1グループである有孔虫の専門家であり、今後、さらなるサンゴ礁生態系についての理解を深めることができるだろう。これからも、その保全を目指して、知見の充実と多くの人々への啓蒙を行っていきたいと考えている。